

正量部の伝承研究(1) : 胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授)

<https://hdl.handle.net/2324/1470460>

出版情報 : 櫻部建先生喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ, pp.217-231, 2002-05. 平楽寺書店
バージョン :
権利関係 :

正量部の伝承研究(1): 胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史

岡野 潔

略号

MSK *Mahāsaṃvartanīkathā*, ed. K. Okano

MKV *Mahākarmavibhaṅga*, ed. S. Lévi (1932)

文献X 『有為無為決択』第八章中に引用された書名不明の正量部文献

櫻部建博士の喜寿をお慶び申し上げます。

問題の設定

正量部に属する文献 *Mahāsaṃvartanīkathā*¹ の4.2.16~18の詩節において、正量部の第五回結集を主宰した二高僧の発言内容として、次のように Bhūtika (MSK によれば Bhūti, 文献Xによれば Bhūtika) と Buddhamitra の言葉が言及される:

さらに〔仏滅後〕第八の百の年に、無垢の輝きをもつ牟尼たちである Bhūti と Buddhamitra が、あたかも月と太陽とがこの世界を輝かせるが如く、牟尼の王 (仏陀) の言葉を明らかにした。(4.2.16)

彼ら二人は語った:〔イネの〕穀の出現をもち、悩まされつづけたる、この劫は第九番目であった。それ(第九劫)にとって、〔人の〕肉体の劣化する七百年のみが今や残されている。(4.2.17)

胡麻・砂糖黍・凝乳などにおいて、それぞれ胡麻油・砂糖黍汁・ギー (ghṛta バター・オイル) などの精髓 (sāra) が現在ある。しかし、まもなく、カリ〔ユガ〕の残りという、夜の魔によって精髓 (sāra) を吸われたそれらの形骸だけが残るだろう。(4.2.18)

この4.2.17と4.2.18の詩節は Bhūtika と Buddhamitra の両者が説いた言葉を伝えていると考えられる。そこには次の(a) (b) (c)三点の主張が含まれている。

主張 (a) : 現在の劫は九番目である。

主張 (b) : 劫末までにあと七百年が残されている。

主張 (c) : 胡麻・砂糖黍・凝乳などにおいて、それぞれ胡麻油・砂糖黍汁・ギーなどが劫末に消失するだろう。

本論文ではこれらの(a) (b) (c)三点の主張のうち、主張(c)を特に検討したい。

なぜ胡麻油・砂糖黍汁・ギーか？

Bhūtika と Buddhamitra の上掲の言葉の中で、なぜ胡麻油・砂糖黍汁・ギーという食品名がわざわざ出されるのか。これは MSK と文献Xを読んでもみると納得がゆく。主張(c)の内容も、(a) (b)の主張と同じく、正量部の伝統の独自性がかなり出たものである。

MSK と文献Xは世界の過去・現在・未来を時間軸に沿って概観する作品であるが、その歴史概観の関心の中心は「現代という時代をどう理解するか」にあり、現代を理解するための鍵となる言葉が、胡麻油・砂糖黍汁・ギーである。文献Xと MSK に記された胡麻・砂糖黍・乳製品の記述を追ってゆくと、そのまま人類の歴史が浮かび上がる。人類の歴史は十不善業道のカルマが悪しき外なる現象(外法)として出現してゆく歴史であり、それを文献Xと MSK は具体的に胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化の歴史として表現している。その歴史は次のようである：

(1) 遠い過去 (胡麻・砂糖黍・乳製品の出現の時代)

人類初代の王たる Mahāsammata 王の時代、食用植物はイネしか存在していなかったが、コメの味が劣化したため、人々は食欲を失ってしまった。するとそれを救うかのように、イネが刈られた後の場所から様々な種類の「副食物」(anubhojana) が出現した。その代表がマメ類、胡麻、そして砂糖黍である。出現当初の胡麻の種は汁に満ちていて、手に握ると三た

びも胡麻油を滴らせるほどであった。大麦なども、当時の人間の福德の大きさに相応して美味であった。また砂糖黍が初めて地に出現した。出現当初の砂糖黍は茎に葉も固い皮もなく、その汁(rasa)はすばらしく美味であった。さらに地上に初めて乳牛が出現した。牛たちは乳搾りせずとも、自ら乳を桶に放出した。乳が桶に注がれると、乳の出る勢いによって自然に乳はチャーニングされてバターとなり、さらにギーとなり、さらに軟チーズへと変化した。このあと牛に続いて、象や馬など人の乗り物となる様々な動物が出現し、調教の必要もなく自ら人に馴れたという。

（2）近い過去から現代まで（胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化の時代）

理想の王 Mahāsammata から代が隔たるにつれ、人々は非道に陥った。人間の道徳的悪化に対応するかたちで大地は豊饒さを失った。食物の収穫が減ったことに気づいた人々は、自分で犁を引いて土を掘り起こし始めた。牡牛たちは自ら犁を引く作業を手伝うことを申し出た。人間は彼らに収穫の分け前を約束した。犁牛はこうして人と一緒に田畑で働き始め、馬や象などは人の乗り物となった。次第に家畜は人間に隷属するようになっていった。乳牛がいやがっても、人はむりやり乳搾りするようになった。十不善業道に陥った人間の不道徳性に対応して、植物に変化が起こった。あたかも人間の貪欲さから身を護ろうとするかのように、砂糖黍は茎に葉を生じて自らを覆った(4.1.8)。胡麻の種は以前ほど油汁をたっぷり含まないようになった(4.1.9)。他の植物においても汁が減少した。植物から得られるすべての食物がこうして劣化したので、人間の寿命は減少した。その後、人間はますます非道に入り込んでいった。農夫たちは貪欲になり、はじめの約束を破って犁牛たちに分け前を与えずに、人間たちだけで収穫を独り占めするようになった。人間たちは牛が従順でなくなり犁を引くのを拒むのを見て、彼らの背を手ひどく鞭打ったり、鼻に孔を開けて綱をつけたりして、むりやり労働させた。人間たちの悪行を見て、馬や象などの動物たちが自ら人に馴れようとはしなくなったので、調教が必要になった。拘留され、鞭で叩かれて、動物たちは人の暴力に屈服し、調教された。人間が乳を搾ろうとすると、雌牛たちはいやがるようになった。そこで人は固い紐で乳牛たちを動けないようにしばって、巧妙な搾乳の技術を用いて乳を

奪うようになった。人間の悪行に対応して、植物はさらに悪化した。砂糖黍は茎が固い皮で覆われるようになったため、汁を搾るのに人は大いに苦勞するようになった(4.1.16)。胡麻の種などは、あまり油汁を含まないものになってしまった(4.1.17)。このような食物の変化で、人間の肉体はますます貧弱化した。人間は悪化する生活の悲惨に苦しめられ、欲望に駆り立てられて、農耕や牧畜など穢れ多い仕事で生計をたてるようになった。どれほど激しく労働しようとも、人間にはわずかな快が得られるだけであった。胡麻や砂糖黍などを栽培するには労苦を必要とし、収穫後にそれらを搾るのがまた別の労苦であった。苦勞して得られた穀物は、質が悪く、まずかった。ひどい食生活によって人の平均寿命はますます低下した。人の寿命は低下し、人壽百歳となった。これが現代の状況である。MSK 4.2.3~5は現代の姿を次のように語る：

食物は甚だ劣悪になっていった、危難の際に人間の心がそうなる如く。百の労苦をもって得られた満足があったとしても、〔それは〕いかほどわずかな快の実現でありえたらうか。(4.2.3)

胡麻と砂糖黍と牛乳が労苦よりて生じたとしても、〔それらは〕別の²労苦によって精髓(rasa；つまり胡麻油・砂糖黍汁・ギー)を分出した。なぜなら、甚だたくさんのことが、もしも苛酷さ(労苦)によってなされるならば、〔少なくとも〕少しの収穫はもたらすものなのである。(4.2.4)

悪しき食に親近して、彼ら人間はさらに寿命などに関し退落(減少)に陥った。下の下なる行動様式に従いながら、誰がこの世界で退落(減少)でなく繁栄(増大)に至らうか。(4.2.5)

(3) 現代から未来(胡麻・砂糖黍・乳製品の消失の時代)

結集を主宰した Bhūtika と Buddhamitra の二人はこのように預言して言った：「この第九小劫は、穀物に殻などが出現して、食物などは悪化の一途をたどってきたが、劫の終わりまでにあと七百年が残されているだけだ。それまでの間、食物はますます劣化し、人間の肉体はますます貧弱化してゆくだらう。現在はまだ、人類の福分のおかげで、胡麻や砂糖黍や発酵乳(dadhi)などから、胡麻油・砂糖黍汁・ギー(ghṛta)などの精髓(sāra)

を得ることができるが、今後はそれも失われてゆく」と(4.2.16~18)。

以上のように人類の歴史を読んでくると、胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化の物語はMSKの第三章から第四章にかけて続く一つの大切な主題になっており、これらの食品劣化の考察は正量部にとって独自の宇宙歴史的な問題であったことがわかる。MSKと文献Xを読む限り、正量部は、次の二つの具体的な悪化の事例を深刻に考えることで、現代という時代の「位置」を理解しようとしていることがわかる：

(1) 人間の労働の過酷化

(2) 胡麻油、砂糖黍汁、ギーの入手困難化

この両者は互いに密接に関連しあっており、未来の人類の破滅に結びつく。正量部は、現在の劫である第九劫は飢餓のために滅ぶと考えていたようである。飢餓は、業の必然の結果として起こる。現代という時代の困難な状況の宇宙論的開明に強い関心を抱く正量部は、特に胡麻・砂糖黍・乳製品等の劣化の問題をとりあげ、それらと十不善業道による人類の墮落の歴史とが密接にかかわっていることを明らかにした。

私たちにとっては思いがけない、胡麻・砂糖黍・乳製品という不思議な着目点から正量部は人類の破滅に向かう一本の道筋を見出したが、正量部の論師たちはどのようにしてこうしたユニークな着目点を発見したのだろうか。実はこの着目点は阿含・ニカーヤから出たものである。BhūtikaとBuddhamitraが語った「胡麻油・砂糖黍汁・ギーなどの精髓がとれなくなる」という預言の言葉の聖典的根拠は、パーリ長部の転輪聖王師子吼経、長阿含の転輪聖王修行経や中阿含の転輪王経などの中にある一文である。それはパーリの転輪聖王師子吼経では「比丘らよ、人壽十歳の時、これらの美味(rasa)は消失せん。すなわちギー・バター・胡麻油・蜜・砂糖黍汁・塩である」(原文: Dasavassāyukesu bhikkhave, manussesu imāni rasāni antaradhāyissanti, seyyathidaṃ sappi navanītaṃ telaṃ madhu phāṇitaṃ loṇaṃ. PTS ed., DN III, p. 71) という文である。この文章に似た文章が正量部の阿含に伝わっていて、そこから、世の終わりに胡麻・砂糖黍・乳製品が得られなくなるという表現が出てきたことが推測される。

美味(rasa)の消失が人壽十歳の時代に起こることは、転輪聖王師子吼経

の平行文献を伝持するすべての部派で知られており、超部派的な教説であって、正量部だけのものではない。劫末に消失する食物名を、経論は次のように記述する：

- ◎長阿含の転輪聖王修行經：「酥・油・石蜜・黒石蜜，諸の甘美味」（大正 1, 41a13）。
- ◎中阿含の転輪王經：「今日有る所の美味：酥・油・塩・蜜・甘蔗・糖，彼の一切」（大正 1, 523a16-17）。
- ◎長阿含の世記經：「世間に有る所の美味：酥・油・蜜・石蜜・黒石蜜，諸の有美味」（大正 1, 144a24-25）。
- ◎起世經：「酥・油・生酥・石蜜・砂糖・粳米」（大正 1, 353b27-28）。
- ◎瑜伽師地論：梵本：「五種のよい味，すなわち，ギー（酥，sarpis）の味，蜜の味，油の味，砂糖黍⁴の変化した味，塩の味」。漢訳：「五種の上味：酥・蜜・油・塩等の味および甘蔗の変ぜる味」（大正 30, 286a11-13）
- ◎正法念処經：「一切の好味：塩・酥・安石榴・蜜・石蜜・甘蔗・稻糧・六十日稻，是くの如き等の味の世間に勝るる者」（大正 17, 399c24-26）。

正量部では特に胡麻油・砂糖黍汁・ギーの三者に焦点をしばっているのに対し、これらの正量部以外の部派の文献を見ると、三者（ギー sappi, 胡麻油 tela, 砂糖黍汁 phāṇita）の他に、蜜や塩などの美味も挙げていることがわかる。正量部以外の部派は特別の意図をもたずに単純に美味を（これら五種の美味は律に「七日薬」として出てくる美味の種類と大同である）列挙しようとする態度をもつが、それに対して正量部伝承が蜜や塩の語を避けているのは、正量部が rasa の言葉を「美味」の意味ではなく「精髓」の意味で解釈したためではないか。「美味 (rasa) が消失する」という阿含・ニカーヤの伝承文の中の rasa の言葉を正量部では単に「美味」の意味ではなく「汁」そして「精髓」(sāra) の意味に解釈したから、胡麻から胡麻の汁が、砂糖黍から砂糖黍汁が、そして凝乳 (dadhi) から牛乳の精髓たるギー (ghṛta) が未来に出来なくなるという教理を立てるにいたったのであろう。蜜や塩はほとんど労力なしに自然が与える生産品であり「精髓」とはいえないから、正量部の伝承では蜜や塩の語を無視してしまったことが考えられる。正量部が rasa の言葉を「精髓」の意味に解釈したことは、次

の MSK 4.2.18 の詩節で精髓(sāra)という言葉が用いられていることから確かめられる。

胡麻・砂糖黍・凝乳などにおいて、それぞれ胡麻油 (taila)・砂糖黍汁 (phāṇita)・ギー (ghṛta) などの精髓 (sāra) が現在ある。しかしまもなく、カリ〔ユガ〕の残りという、夜の魔によって精髓 (sāra) を吸われたそれらの形骸だけが残るだろう。(4.2.18)

この文から胡麻の精髓が胡麻油であり、砂糖黍の精髓が砂糖黍汁であり、凝乳の精髓がギーであることは明らかである。胡麻油・砂糖黍汁・ギーの問題を扱う正量部のユニークさは、この三つの食べ物をクローズアップして、それらが段階的に入手困難になってゆく状況を過去・現在・未来の三時代のそれぞれに対応させたことである。文献XとMSKの記述に基づく胡麻油・砂糖黍汁・ギーの時代ごとの変化を、過去・現在・未来の三段階に配置すると、次のようになる：

(イ)胡麻油の場合——過去：胡麻は三たびも油を滴らせた→ 現在：不善業道の結果、胡麻を搾ってもあまり胡麻油が出なくなった→ 未来：胡麻がカスカスになり、いくら苦勞しても一滴も胡麻油が出なくなる。

(ロ)砂糖黍汁の場合——過去：砂糖黍には葉も皮もなく、容易に汁が得られた→ 現在：不善業道の結果、砂糖黍の皮が厚くなり、汁を搾るのに苦勞する→ 未来：いくら搾っても一滴も汁が出なくなる。

(ハ)ギーの場合——過去：乳を絞る必要がなかったし、ギーは自然に生じた→ 現在：嫌がる牛からむりやり乳を絞り、さらに数時間のチャージングの労働の結果としてやっとギーが生じる→ 未来：いくらチャージングしても凝乳からギーが出来なくなる。

これらの食品の三段階の変化の背後には、次のような人間の食物獲得の労働条件の段階的変化の図式が隠されていると思われる：

過去：人間は労働する必要がなかった→ 現在：人間は多く働いても、わずかしか酬われない→ 未来：人間は懸命に働いても、全く酬われない。

現在という時代において、胡麻油・砂糖黍汁・ギーを入手するために長

い時間の労働が要ることは周知の事実である。たとえば凝乳 (dadhi) からギーを生じさせるために、ヒマラヤのシェルパ族は毎日三時間もこのチャーニングに労力を費やしている。凝乳というものは労働しないで生乳を桶に入れて数時間放置するだけで手に入るものであるが、しかし凝乳からギーを生じさせる段階では、人間の労働が必要になってくる。正量部の宗教者は哲学的に、なぜ人間は現代においてこれほどまでに労働に駆り立てられ、労働に疲労し、労働の奴隷となっているのかを考えたのであろう。現代の過酷な労働を必要とする人間の生存状況は原因なくして突然起こった出来事ではなく、人類が欲望を増大させ人類全体が犯す十不善業道の結果として、過去から現代まで進行してきたプロセスである。労働とその報いとしての生産物の交換率は時代とともに変化するが、その交換率をひそかに決めているのは、人類全体の福德である。つまり時代の業である。時代の悪化の指標とは、労働とその報いとしての生産物の交換率の変化である。なぜこの交換率が変化するかということ、その時代時代の人類全体の陥っている十不善業道の結果としての悪しき共業のせいである。正量部の僧侶たちはこのように時代を支配する悪業に考えをめぐらし、阿含聖典の転輪聖王師子吼経の中の、ラサの消失を告げる一文をヒントにして、未来においては事態はさらに悪化し、胡麻油等の完全な消失に至ることを確信したのであろう。そして正量部内で、その消失にまでかかる時間を七百年であると見る僧侶も出現したのであろう。

正量部が犢子部から分離して独自の教団を結成した時代は、インドの歴史の中でも大きな転換期であった。不安の時代の中で、それら正量部の僧侶たちが労働の報いの少なさと食料難の現象が起こっている現代という時代、そして飢餓のカタストロフが起こる七百年後の劫末の有り様を具体的に示す「時代の象徴」として注目したのが、胡麻油・砂糖黍汁・ギーであったのだろう。正量部の結成の百年後に教団を再結成させた Bhūtika と Buddhamitra の預言の意図は、現代を劫末に近い時点に位置づけ、胡麻油・砂糖黍汁・ギーの問題を、小三災の第三番目である飢餓による破滅の中で人類の大半が死滅する劫末の時が近づいたことを人間が知るための指標として考え、それをやがては破滅に至る問題として真剣に現代の人類に反省を促そうとしたものと思われる。

MSK 3.4.6 の次の偈は「今日」の(乳製品生産の)状況を「わずかながら人の希望通り」になる状況と考えている点で注意されるべきである：

〔生乳の〕噴出によってチャーニングされた故に、バター (navanīta) が、それからギー (ghṛta) が、それからチーズ (maṇḍa) が生じた。それ(化牛出現時)以前には知られなかったこの〔乳製品生成の〕「連続」は、今日もわずかながら人の希望通りのものである。(3.4.6)

以上見てきたところから、胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失とは、現代という時代が直面している危機の典型と正量部の宇宙論が考えていたらしいことが理解できるが、このことから、Bhūtika と Buddhamitra の預言の中に(c)の主張が含まれてるのは必然であったといえよう。

正量部の独自性は、阿含・ニカーヤの伝承としての転輪聖王獅子吼経の中の一文中に注目して、それを聖典的根拠としつつ解釈を施して、現代の状況を批判する預言にまで高めた点にある。諸部派のアビダルマに胡麻油・砂糖黍汁・ギーについて正量部と全く同じ見解があった気配はない、たった一つの例外を除いて。その例外とは *Mahākarmavibhaṅga* である。十不善業道の結果としての胡麻・砂糖黍・乳製品の入手困難化・消失に記述の重点を置いた人類の歴史の反省は、正量部の文献にしか見られない独自のものと私は考えていたのであるが、しかしこのように人間の十不善業道の結果としての胡麻・砂糖黍・乳製品の消失を告げた文献は、正量部の MSK と文献 X のほかに、梵文 *Mahākarmavibhaṅga* (略号 MKV) があることに気づき、驚いた。このため、ここで梵文 MKV の犢子部・正量部所属説が問題となる。

Mahākarmavibhaṅga の所説の、正量部の所説との類似

梵文 MKV は、並川孝儀によって既に犢子部・正量部所属説が出されている。並川以前にも、S. Lévi (1932) は MKV の根本有部所属の可能性に否定的であり、Tripāṭhī (1966) は MKV の伝承が中央アジアの有部の阿含伝承と明確に異なることを証明したが⁵、並川はそれが化地部と有部のもの⁶でないことは確実で、恐らく法蔵部でも大衆部系のものでもない⁷と推測

し、他部派の可能性を一つずつ除いてゆき、また MKV に六道説が見られることなどに注目して、最後に犢子部・正量部系という結論にたどり着いた。並川がこの所属説を出した時点では、まだ正量部所属が確実な文献 MSK は発見されておらず、両者の比較はなされ得なかった。

私は MKV の次の一節は、他の伝承と比較して正量部の MSK に最も近い伝承であり、そのことは並川の MKV の犢子部・正量部所属説を援護する一つの有力な根拠となると考えている。その問題となる文は次のものである：

邪見 (mithyā-dṛṣṭi) という不善業道の報いとして、ピチュマンダ (picu-manda) とかコーシャータキー (koṣātakī) とか有毒で苦いアーラブ (viṣa-tiktālābu) を始めとする、苦くて辛い果実が出現する。また邪見という不善業道の報いとして、虚無主義者が現れる。あるいは断滅論者やローカーヤタたちの論書などに〔人々は〕信を寄せるだろう。例えば Śvetikā に〔住む〕 Kumāra-kāśyapa に導かれてローカーヤタ論者になった Pādāśva 王子のように。衆生がこれら十不善業道を働けば働くほど、それに応じて十種の外法の (daśānām bāhyānām bhāvānām) 出現がいつそうある。そしてこれが原因となって、将来、マハー・サンヴァルタ劫 (mahāsamvarta-kalpa) においては、⁷ 胡麻 (tila) も胡麻粉 (tila-piṣṭa) もあるが、胡麻油 (taila) はなくなるであろう。砂糖黍 (ikṣu) はあるが、砂糖黍汁 (ikṣu-rasa) も粗糖 (guḍa) もなくなるであろう。砂糖 (khaṇḍa) もざらめ糖 (śarkarā) もなくなるであろう。その時期には、牛はいるであろうし、牛乳 (kṣīra) もあるであろう。凝乳 (dadhi) もあろう。しかし、バター (navanīta) やギー (ghṛta) やギー精製品 (ghṛtamāṇḍa) はないであろう。このように、数え上げてゆけば際限はないが、あらゆるものの精髓 (rasa) がこの世から消えてなくなるであろう。⁸

この文で、胡麻・砂糖黍・乳から作られる製品について、残るものと残らないものの二段階を明確に区別していることは注目される：(1) 「胡麻 (tila) も胡麻粉 (tila-piṣṭa) もある。しかし胡麻油 (taila) はない」——(2) 「砂糖黍 (ikṣu) はある。しかし砂糖黍汁 (ikṣu-rasa) と粗糖 (guḍa) と砂糖

(khaṇḍa) とざらめ糖 (śaṅkarā) はない」——(3)「牛はいるし、牛乳 (kṣīra) と凝乳 (dadhi) もある。しかし、バター (navanīta) とギー (ghṛta) とギー精製品 (ghṛtamaṇḍa) はない」。この三食品の二段階の区別は MSK の記述と一致するといえよう。つまり、パーリ長部の転輪聖王獅子吼経、また有部や法蔵部や瑜伽師が伝持するそのパラレル文献では、塩や蜜を含めた五種の美味が列挙されるのに対し、MSK や文献 X の伝承は塩と蜜を記さずに、胡麻油と砂糖黍汁とギーの三つの出現に問題を絞っている点で特徴がある。この MKV の伝承でも塩や蜜が含まれていない点で、MSK や文献 X の伝承と一致している。さらに、MKV のこの文が胡麻→胡麻油、砂糖黍→砂糖黍汁、乳や凝乳→ギーという二つの段階における第二段階の消失を問題にしているのも MSK や文献 X と問題意識が共通する。転輪聖王獅子吼経の「美味 (rasa) が消失する」という文の rasa の語を、MSK や文献 X の伝承では「美味」の意味よりも、むしろ「精髓」(sāra) の意味にとることで独自の解釈を深めていったと思われるが、MKV も rasa の語を同じように解釈したことがうかがえる。

このほか、MKV のこの文が他の伝承と比較して MSK に近いと私に思われるのは次の二点である：

(1) MSK も MKV も十不善業道を前提に胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失を考え、両者とも「外法」(bāhya bhāva) という言葉を用いる。十不善業道の「外法」つまり外的現象として、胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失の問題が捉えられている。

(2) 十不善業道の邪見の結果として虚無主義者・断滅論者やローカーヤタが現れ、また食物が悪化するという MKV の上記の記述に、MSK や文献 X との思想的な繋がりが感じられる。MSK 4.2.1-4 と文献 X の §§127-130 の一連の記述では、十不善業道の進展の結果として五濁の時代に邪見(つまり誤った哲学宗教である虚無主義・断滅論など)を弘める精神的指導者たちが現れ、そのあと食物が悪化することが語られ、それが胡麻・砂糖黍・牛乳の精髓を得ることの人類の労苦と関連づけられている。邪見の論者の出現と食物悪化と胡麻・砂糖黍・牛乳からの精髓の獲得の困難の問題の三者を組み合わせている文献 X や MSK は、あたかも MKV の上掲の一節に示さ

れた教理を知っていたかのようなのである。

さて梵文 MKV の平行文献として二種のチベット訳があり、それぞれ内容に多少の相違がある。梵文 MKV の先の引用した一節に対応する二種のチベット訳の該当箇所を調べてみると、第一のチベット訳 *Karmavibhaṅga* (東北 No. 338) にも、十不善業道の「邪見」の結果として胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失が同じ箇所に語られていることは注意すべきである。第二のチベット訳 *Karmavibhaṅga nāma dharmagrantha* (東北 No. 339) では該当箇所つまり十不善業道の「邪見」の説明は簡単で、胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失などに一切触れずに済ませている。そのため第二のチベット訳は問題にはならない。

第一のチベット訳のその該当箇所 (Lévi 本の LXI) では次のように語られる：

邪見の不善業の報いとして、果実が実らない・少量である・毒をもつ・萎れてしまう事などが現れるだろう。また同じ行為の報いとして、虚無主義者や断滅論者やローカーヤタの論書などに〔人々は〕信を寄せるだろう。これら十の不善業道が働かれば働かれるほど、それに応じて〔悪しき外法の〕増大がいつそうあるだろう。そして、これが原因となって、破壊時においては、胡麻はあっても胡麻油は出現せず、砂糖黍はあっても粗糖は出現せず、粗糖はあっても精糖や砂糖は出現せず、牛はいても乳は出現せず、乳はあってもギーは出現しない。このように十不善業道の報いによって、外法 (bāhya bhāva) が悪化するだろう。¹⁰

この文中にある「砂糖黍はあっても粗糖は出現せず、粗糖はあっても精糖や砂糖は出現せず、牛はいても乳は出現せず」という文は全く余計な強調であり、いかにもそれは MSK や文献 X や梵文 MKV に見られる本来の伝承に込められた哲学的な意図、つまり胡麻→胡麻油、砂糖黍→砂糖黍汁、乳や凝乳→ギーという二段階変化がもつ意味への無知を表している。これは本来の伝承の言わんとする考えがわからなくなって、いいかげんに強調的な付加を施した混乱しつつある伝承の段階を伝えたものであろう。しかし、この第一のチベット訳の伝承は、梵文 MKV の伝承よりも少し墮落し

た伝承であったとしても本来は梵文 MKV の伝承と同じであったと推測される。ここから、もし上の議論のように、梵文 MKV が胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失を言及しているが故に正量部と関係があることが疑われるなら、同様に第一のチベット訳も同じ理由で正量部所属を疑われねばならないことになる。

この第一のチベット訳の部派所属に関して、並川（1984, p.61）は、MKV と第一のチベット訳の両者が引用する諸経典は文面がよく一致することを指摘した上で、両者が「同一経典を依所として引用しているに他ならない」と結論づけている。つまり MKV と第一のチベット訳との関係については、この並川の指摘のように同一の部派伝承に属する可能性が濃厚であるといえる。このように第一のチベット訳と梵文 MKV とが同一の伝承上にある関係と見なしうるならば、そのことは第一のチベット訳の伝承にも胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失が語られていることを何ら不思議ではないものとする。それは第一のチベット訳の伝承を、梵文 MKV と同一の部派伝承に属するような異ヴァージョンの作品として考え、梵文 MKV の正量部所属の仮説を適用してしまつてさしつかえないことを意味する。

さて、私たちは MKV において、胡麻油・砂糖黍汁・ギーの消失という正量部独自の宇宙論の強調点をぴったりアビダルマ的に説明した記事に遭遇したわけであるが、これは偶然であるまい。MKV が正量部か、正量部に近い部派に属すると考えれば、それは偶然ではなくなるわけである。このことだけでは MKV の正量部所属説を証明するには弱すぎるであろうが、しかし他の積極的理由——たとえば並川が指摘するように、MKV が五道ではなく六道を説くということ——と共に考え合わせるならば、並川の出した犢子部・正量部所属説は現時点で最も有力な仮説といえるだろう¹¹。慎重を期すため、MKV が正量部に属さないという主張の根拠になりそうな記述を私は MKV の中に探してみたが、未だ見出していない¹²。

注

¹ Kiyoshi Okano: *Sarvarakṣitas Mahāsaṃvartanīkathā. Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāṃmitīya-Schule des Hīnayāna-Buddhismus*, Tohoku-Indo-Tibetto-Kenkyūsho-Kankokai, Monograph Series I, Sendai, 1998. この書は少数のみ出版されたにすぎないが、その改訂版がまもなくドイツの *Indica et Tibetica* 叢

書から出版される予定である。MSK に関する論文は現時点で次のものがある：岡野潔 (1994)：「新発見の仏教カーヴィア Mahāsaṃvartanīkathā—特に, Amṛtānanda 本 Buddhacarita に見られる, その借用について—」, 『印度学仏教学研究』第43巻1号, pp.134-139；岡野 (1998a)：「いかに世界ははじまったか—インド小乗仏教・正量部の伝える世界起源神話—」, 『文化』第62巻1・2号, pp.176-158；岡野 (1998b)：「新発見のインド正量部の文献」, 『印度学仏教学研究』第47巻1号, pp.376-371；岡野 (1998c)：「インド正量部のコスモロジー文献, 立世阿毘曇論」, 『中央学術研究所紀要』第27号, pp.55-91；岡野 (2000a)：「正量部の歴史的宇宙論における終末意識」, 『印度学仏教学研究』第49巻1号, pp.406-402。

² 牛乳 (go-rasa 牛の汁) の精髓 (rasa) とはギー (ghṛta) である。牛乳の「汁」(rasa) がギーなのではなく, 牛乳の「エッセンス」(rasa) がギーなのであろう。つまり rasa を訳す場合には, 「味」／「汁」／「精髓」の三つの意味を適切に訳し分けないと, なぜ go-rasa の rasa がギーなのか, 理解できないことになる。

³ ここで「ギー」と訳した原語は sappi (skt. sarpiś) である。ghṛta と sarpiś は同じものであると私は思う。漢訳の「酥」である。

⁴ 梶山雄一 (1997)：「瑜伽師地論の宇宙論 [試訳]」, 『佛教大学総合研究所紀要』第4号, p. 8. これは Vidhushekhara Bhattacharya, ed. (1957): *The Yogācārabhūmi*, Part I (University of Calcutta) からの訳である。

⁵ S. Lévi (1932): *Mahākarmavibhaṅga et Karmavibhaṅgopadeśa*, Paris, p. 11; C. B. Tripāthī (1966): “Karmavibhaṅgopadeśa und Berliner Texte”, *WZKSO*, X, S. 219.

⁶ 並川孝儀 (1984)：「Mahākarmavibhaṅga 所引の経・律について」, 『佛教大学研究紀要』第68号, pp. 53-76.; 並川 (1985)：「Mahākarmavibhaṅga の所属部派について」, 『印度学仏教学研究』第33巻2号, pp. 773-769.

⁷ MKV がこの引用箇所を用いている「マハー・サンヴァルタ劫」 mahā-saṃvarta-kalpa という複合語はこれ以外に典拠がなく, しかも正量部の一文献の名前 Mahāsaṃvartanīkathā を連想させる。saṃvarta の語は有部等の他部派の文献では「大三災 (火災・水災・風災)」の意味で使われることが多いが, しかし MKV のこの mahāsaṃvarta-kalpa の語は明らかに「小劫の終わりの時期」「小三災 (刀兵・疾病・飢餓) の時期」の意味で使われている。このことは, MSK の題名の解釈にも問題を投げ掛ける。というのは, MSK という作品の中心的主題は, 「大三災」ではなくて, 現在の人類が直面している「小三災」の方にあると考えた方がよいからである。「劫末意識」をもつ正量部においては mahāsaṃvarta の語が, 他部派とは異なる意味で使われていた可能性を示すものである。

⁸ 岩本裕の訳文 (『佛教聖典選第一巻 初期経典』, 読売新聞社, 1974年, 323頁) もあるが, 別に訳してみた。原文は S. Lévi (1932), *op. cit.*, pp. 79-80にある。

⁹ MSK 4.4.3 の次の詩句に bāhya bhāva (pl.) という言葉が使われている： *bāhyādhyaत्मिका-bhāveṣu gateṣu evaṃ samātmātām* | 「外と内とのあらゆる存在物がかくの

如く同一の性質を有することへと至る時」。MSK 5.1.2でも、bāhyāḥ の一語が「外界のあらゆる存在物」を意味して用いられている。他方、MKV においても bāhya bhāva の語は繰り返し出てくる（ed. Lévi, pp. 31, 78, 80）。

¹⁰ チベット訳テキストは Peking 版, TTP, vol. 39, 123頁4段, 303b, ll. 4-7にある。Lévi 本, p. 205, LXI にもあるが、ナルタン版をローマナイズしたものにすぎず、校訂されていない。

¹¹ なお MKV §62 が「madhyadeśa（中央地方）における四大聖地（catur-mahā-caitya）、Lumbinī や Mahābodhi を始めとする〔地〕で、如来の廟に合掌し礼拝すれば、十種の功德がある」と説いて、中インドにある仏蹟地巡礼の功德を盛んに強調していることは、「中インドの主要仏蹟はほとんど正量部の独占的管理下にあった」と静谷正雄が指摘する（『小乗仏教史の研究』, 229頁）、正量部の主要仏蹟支配の歴史的事実と無関係ではないように思われる。

¹² 並川は MKV において出てくるダンマパダの合計3詩節の引用が、正量部所属らしい Patna Dhammapada の文面と完全に一致しないことに気づいた（並川（1985）, p. 769, 注17）。しかし並川は正量部の内部において複数の伝承系統があったのではないかと考えることで、この不一致を説明しようとする。（私も賛成である。）

付記

本稿の脱稿後、福田琢が昨年発表した加藤清訳のチベット訳 Lokaprajñapti に次の文があることに気づいた（福田琢（2000）：「加藤清遺稿 蔵文和訳『世間施設』（3）」、『同朋仏教』36, p. 52）：「[55b¹] 寿命十歳の諸人の五種の味（rasa）は消失するなり。五とは如何。乳（kṣīra）あり、また酪（dadhi）ありと雖も酥油（ghṛta）は生ぜず、胡麻（tila）あり、また胡麻の粉末ありと雖も胡麻油（taila）は生ぜず、蜜蜂（bhramara）あり、また蜜蜂の汚汁ありと雖も蜂蜜（bhrāmara, madhu）は生ぜず、甘蔗（ikṣu）あり、また汁ありと雖も黒糖（guḍa）は生ぜず、塩（lavaṇa）は腐るなり」。——この文は、先述の MKV の文に対して、有部の伝承がどのような形であったかを示す。有部の Lokaprajñapti の伝承は、MKV のそれと内容的に次の二点で異なっている：（一）この有部の伝承では五味の消失を問題にしているのに対し、MKV は胡麻・甘蔗・乳の三つの食品系統で生じる消失を特に問題にしている。（二）この伝承では甘蔗（ikṣu）の汁が生じることを認めているが、MKV は認めない。この二点において、MKV は正量部の伝承の方に一致し、有部の伝承と相違していることが確かめられる。なお、上の訳文の「蜜蜂の汚汁」は「蜜蠟」と訳すべきであろう。（2001. 9. 16記）

櫻部建博士
喜寿記念論集

初期仏教からアビダルマへ

櫻部建博士

喜寿記念論集

初期仏教から
アビダルマへ

平樂寺書店

平樂寺書店